

ikeeco

2024
vol.44

“住む人が主役の家づくり”に、もっとファンを！

次世代に残る建築をサポート

資産価値のある建築を 地域工務店とつくる

特集

ドイツ・オーストリア・スイス
第26回エコバウ建築ツアー
2023ツアー紀行
〔前編〕





モデルハウスから社屋建築へ 地域工務店へ新たな提案

2021年のコロナ禍、建材販売店として地域工務店の営業支援を目的としたモデルハウスの建築から2年 (ikeco vol.36掲載)。ウッドライフはさらに自社の提案レベルを高めるため、シュタイコ木繊維断熱材を採用した新社屋を愛知県常滑市で昨年の11月に開設した。新社屋に設定されたテーマは「サステナブル建築」30年後にも通用するであろう基本性能を有するだけでなく、廃棄時にゴミにならずメンテナンス時にも傷んだ部分のみを取り替えられるような建築材料を極力用い、持続可能性のある建物が実現した。

モデルハウスではなく社屋であるという点で、利用者は自社の社員や顧客の工務店、施主のみならず、設計事務所や出入りする関連業者など、多くの人が高い建物性能を体感できる場となった。「まず高い断熱・気密性能を確保するのは当たり前で、環境配慮型の建物で将来的に廃棄物をほとんど出さないことを目指しました」そう語るのは、創業15年目を迎えたウッドライフの太田社長。資産価値のある住宅というのは何か、ということは人によって考え方が異なる。しかし、家の処分やリフォームをする際の廃棄物の処理費用は高騰する一方で、施主

やその次の世代に大きな負担を残すことになりかねない。今回は住宅ではないが、木繊維を原材料とするシュタイコのような高性能で土に還るまたは再利用可能な素材などを用い、少しでも将来の負担を減らすことで建物の資産価値を守り続けられるのではないかと、という考えに至ったという。また、2025年に全ての建物に省エネ基準適合を義務化されることに向け、既にハウスメーカーやパワービルダーの対策は整い始めている。そんな中、地域工務店が対抗策として断熱や気密などの性能だけを上げて、提案の差別化には繋がらないことを見据えた新社屋の計画でもあった。

デザインと高性能の両立 体感と学べる場として

新社屋の基本設計はスイスやオーストリアのサステナブル建築に大きな影響を受け、デザインとエコロジー建築の融合に定評のある、もろくす建築社（秋田）の佐藤欣裕（やすひろ）さんに依頼。実施設計と監理には、取引先の中でも成長著しいTrunk design office（三重）の上村州繁さんが担当することとなった。

上村さんが佐藤さんの活躍を詳しく知ったのは、2020年。オンラインBigセミナー「地域を拓く設計術」で佐藤さんの講演を聴き、建物のデザインと性能を両立させるための考え方や手法に感銘を受けたのが始まりである。

「東海地区は日本を北と南に分ける中間に位置し全国でも平均的な気候風土のため、他のエリアに比べて断熱や気密に対する取り組みに関して発展途上なところを感じていました」

と、上村さん。意匠をファッション性で選んだり、建物を単なる耐久消費財のように捉えたりしがちな施主に対して、自身の手がける建築の提案内容について逡巡していたところ、佐藤さ

んのセミナーが現在の方向性を見いだすきっかけとなったという。

それから3年、社会の本当の資産になるような建物を造り続けたいという思いを強め、自ら手掛けたシュタイコの採用物件は今回で4件目。既に佐藤さんの実践する住宅性能と同レベルでの現場を経験済みで、協働するのに万全な体制が整っていた。

上村さんは太田社長より新社屋のプランについて打ち明けられた当初、建材販売店の社屋でサステナブル建築をテーマとしたことへの希少性に驚くと共に、完成後の建物の活用方法についても大きな可能性を感じた。

「正直、シュタイコやこの建物に使われている表面には見えない建材は、施主提案時にコストに見合った価値があると十分に説明しないといけないものが多く、簡単に建築業者が取り入れられるようなものではありません」

その提案が難しい材料を、実際に建てることで建築業者自身に体感してもらう。そしてさらに、

その体感がそれぞれの建てる住宅のクオリティを高めることに結び付くという太田社長の考えに、上村さん自身もとても共感できたという。新社屋に採用された断熱や気密に関連する建材は、シュタイコの他、NORD製の木製サッシやドイツ・ウルト社の副資材などを採用。しっかりと基本性能を確保したことで設備にはこだわる必要がなくなり、エアコンの設置数も少なくできた。また、換気に関しても、これまでの「高気密高断熱＝第1種換気」という概念から「これだけしっかり断熱材を入れれば第3種換気で十分」という仕様に落ち着いた。

「断熱性能は、UA値が0.28でC値が0.5なので『G2.5』といったところです。でも部屋に入ってきてG3とG2.5の違いに気づく人って、ほとんどいないと思うんです。やっぱり室内の雰囲気だとか、なんとなく温度ムラのない心地よさを体感するのがシュタイコの良さだと思っています」と太田社長。





働く人の健康にも配慮 輻射を感じる木繊維断熱材『シュタイコベース』

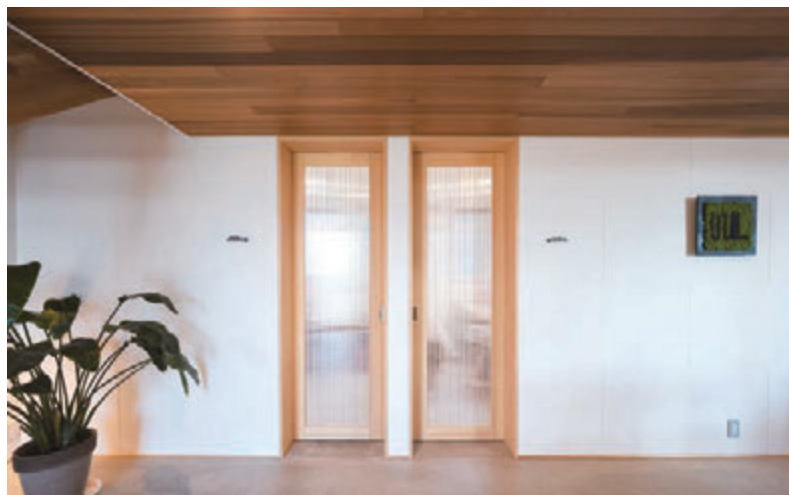
新社屋の内壁の仕上げには、天然粘土塗料レームファルベを採用。高い調湿性を持つ上品でマットな白色の壁は、木繊維断熱材『シュタイコベース』の上から直接塗装を行って仕上げている。「日本でいうと土壁に近い材料で、いわゆる真壁に泥を塗って上から漆喰で仕上げる感覚と同じです。」と、上村さん。シュタイコをそのまま室内側に露出させることで輻射が感じられやすく、この断熱材の最大の特性である蓄熱容量の高さをより生かせる仕様となっている。輻射や体感のことを言葉だけで施主が直ちに理解することは難しく、とても分かりにくい。

だからこそ、理屈ではなく多くの人が体感できる建物がとても重要なのだと上村さんは念を押す。また、知多半島から伊勢湾に向かって海沿いに建つ新社屋は、職場から海が見える絶好のロケーションではあるが、塩分や水分を多く含む風が強く吹きつける日も多い。しかし、シュタイコの採用により調湿性や遮音性が高まっているため、建物内で働く社員がその湿気や騒音を感じることはほとんどない。湿度が安定しており、温度ムラのない温熱環境。さらに静けさを伴った健康で快適な室内環境は、朝から夕方まで1日のほとんどを過ごす社員にとって、以前の社屋とは比べものに

ならないほどの居心地の良さだという。特に女性社員からは「暖かさがいちばん違う」との感想も。外気温が10℃を下回るような日でも、室温が平均で18、19℃（相対湿度45％）を維持。それには「輻射熱を感じられるようなエコロジーな材料を選んだことで、体感温度に大きな違いが出ているのではないかと太田社長。社屋1Fの床はシュタイコ同様に蓄熱容量の高いモルタル土間が打たれるなど、気温が10℃前後の日であればエアコンを運転するのも日に2時間程度という、機械に頼らなくても済むサステナブル建築が実現した。



1Fの床は蓄熱性の高いモルタル仕上げ。
冬は日射を取り込み温められた土間床が室内をゆっくりと温めてくれる



内装壁は木繊維断熱材シュタイコベースを張り、
その上から天然粘土塗料のレームファルベを塗装し仕上げている

資産価値のある住宅が地域の貢献に繋がっていく

「とにかく1軒でも多く資産価値の高い家を増やすことで、顧客を含め私たちも地域貢献をすることになり、全てが繋がっていくんだと思います」と太田社長。

2008年の創業前から、住宅は地場産業の一つであるという認識を持ち、工務店支援という名の下で工務店側の意識が変わることばかりを期待するだけでなく、流通側の意識を変えていく必要性も強く感じてきた。そのためには顧客へ確実にプラスになるシュタイコのようなエコロジー建材の取り扱いの拡大やサポートを増やすことについても常に考えている。既に好評の自然素材のみで構成する外構デザインのサポートに加え、吹き込み断熱材シュタイコセルの施工の内製化など、さらに顧客が採用しやすい仕組みづくりの構築も進めているところだ。

ウッドライフの今回の新社屋は、顧客である地域工務店に大きなインパクトを与え、2021年のモデルハウスの完成後とは違う手応えを得ることとなった。竣工後に社屋の2階で開催したもくろす建築社 佐藤さんのセミナーには、60社80名以上の建築関係者が参加。既に断熱の考え方などは各々で確固たる基準を持ち実践をしている、30代の経営者の参加が目立ったことは未来に繋がる明るい材料だ。今後は、東海3県の顧客にメーカーや流通業者が「この指とまれ方式」で集まるのではなく、自発的に意見交換や技術交流のできる場として新社屋を活用してもらえるよう期待している。

一方、上村さんはウッドライフの新社屋完成が目前であった、昨年10月末にエコパウツアーに参加。ドイツで再生可能資源を原材料とする

断熱材の中でトップシェアを誇る、シュタイコの市場への浸透性を認識する機会もあった。現地では、シュタイコ社や断熱材の施工現場などを訪問。数値の話や詳細な商品説明はほとんどなく、メーカーから設計、施工業者に至るまで「持続可能な建築にふさわしい材料を選んで使うというのは当たり前だ」とそれぞれが口にすることに驚かされたそう。施工業者の意識も高く能動的にシュタイコの施工を進める、生き生きとした現場風景がとても印象に残っているという。

また、スイスやドイツで数百年前の建物がホテルやレストランになって利用されているのを目にする機会が多く、今回の新社屋についても「100年後には違う利用のされ方をしているかもしれない」と感じたそう。実際にダクト式の設備など複雑な要素は持たず、メンテナンス時に交換しなければいけない部材などもほとんどない建物なので、100年後も色褪せず社会の資産となって残り続けていることを想像している。

「RCに比べ家の中に熱を溜める容量が少ない木造では、壁や天井にシュタイコのような蓄熱容量の高い断熱材を使うことが、やっぱり省エネや健康の観点からもとても効果的なんです」この3年だけでもさまざまな時代の変化を受け、建物全体のコストバランスの配分に苦労する面は増えたが、それでも最適な温熱環境を造り出すための建築を繰り返し実践し体感してきた上村さん。シュタイコについては建物の総面積を減らすなどのマネジメントをしてでも使う価値があると、今後も施主にきっちり伝え続けていきたいと考えている。



Nobuyuki Ota

太田 信之

株式会社ウッドライフ 代表取締役

愛知県常滑市で2008年に創立の建築資材・建材販売会社。今年で創業15年目を迎え創立以来、地域工務店を自身のアイデアと創造力でサポートし続けている。工務店の持つ悩みを一つひとつ解決し、共有することで工務店同士の繋がりを強めている。



Kunishige Uemura

上村 州繁

株式会社トランクワークス 代表取締役

1985年三重県生まれ。ハウスメーカー、工務店、設計事務所にて勤務した後、2021年に独立。ドイツやスイスの環境建築に影響を受け、意匠と性能を1つのカテゴリとして設計することに取り組んでいる。



新たに取り扱うNORD製木製サッシ（写真は大型引き戸）。重量のあるサッシだがスムーズに開閉でき気密性も高い



～持続可能な省エネ・

木造建築と自然と調和する建築の旅～

コロナ禍以降 4 年振りにエコバウ建築ツアーを再開することができました。多く皆様から再開を喜んでいただき、ツアーの案内開始早々に定員を迎えるなど改めて皆様の関心の高さをうかがい知ることができました。

今回のツアーでは、ドイツ・オーストリア・スイスの 3 カ国を 4 年振りに巡ります。

欧州の最新の建築を肌で感じ、著名建築家から直接お話を聞ける貴重な旅。

本ツアーにご参加いただいたアーキテクト工房 Pure 代表取締役 高岡様から寄稿いただいた内容を元に
前編・後編の 2 回に分けてご報告致します。



寄稿／
アーキテクト工房 pure
代表取締役

高岡 文紀
(たかおか ふみのり)

愛媛県松山市を拠点に「世界基準のパッシブハウス 5 つ星の快適を日常に」という強いメッセージで、デザイン×高性能×自然素材、3 拍子そろった家づくりを提案する。
一般社団法人パッシブハウスジャパン理事を務め、パッシブハウス認定物件も数多く手掛けている。
また、住まうオーガニックを提案する『House de Organic』を主宰するなど、高性能な家づくりの普及活動にも努めており、卓越した工務店経営手法は高性能住宅ビルダーの模範的存在でもある。

今回、初めてイケダコーポレーション主催のエコバウ建築ツアー 2023に参加した。ツアーの事をHPで知り申し込みしたところ、既に定員人数との連絡を受ける。残念な思いをしながらキャンセル待ちをしていたところ、空きが出たとの事で参加する事ができた。海外視察は2019年12月にオーストリア ウィーン東部に建築されていたCLT24階地上84mの『HOHO』他を視察に行つての4年ぶりのヨーロッパである。愛媛県松山市からの参加で羽田空港に向かう。松山空港の始発に搭乗予定であったが、朝空港に行くと前日のバードストライクで点検の為、始発便はまさかの欠航。空港会社の計らいで他の空港会社の始発便に振り替えてもらい何とかツアーに参加することが出来た。初日からご迷惑、ご心配をかけてしまった。無事国際線に搭乗ができて十数時間の長いフライトでミュンヘン空港に到着、入国審査後バスに乗り込みホテルへ向かう。ホテル内のレストランでウェルカムパーティーの催しである。

パーティー内で本ツアーのコーディネーターを務める滝川 薫さんをご紹介して頂き、ツアー参加者の皆さんと名刺交換を行いエコバウ建築ツアー 2023 ドイツ・オーストリア・スイスを巡るツアーの始まりである。

第26回 エコバウ建築ツアー2024 スケジュール

日 程	行き先	都 市
10月29日(日) 🇩🇪	出国 到着後 ウェルカムパーティー	Munich市
10月30日(月) 🇩🇪	STEICO本社 プリンツ・オイゲン・パーク STEICO Zell施工現場	Feldkirchen村 Munich市 Dornbirn市
10月31日(火) 🇩🇪 🇸🇪	ホルガー・ケーニッツ氏講演 建築家 ヘルマン・カウフマン氏建築案内 ・修道院施設の改修 ・電力会社ビルIZM ・社会福祉的な木造集合住宅	Munich市 St.Gerold村 Vandans村 Götzis村
11月 1日(水) 🇨🇭	美しいZEH住宅 10世帯のZEB分譲住宅ソーラーパーク+	Eschenz村 Wetzikon市
11月 2日(木) 🇨🇭	HAGA本社 スイス漆喰、土壁利用の住宅・店舗	Rupperswil市 Bremgarten村
11月 3日(金) 🇨🇭	木造会社 シェアホルツバウ ZEB製材所 5階建て木造集合住宅「シェアルーム」	Altbüron村 Malters村
11月 4日(土) 🇨🇭	持続可能な住宅地エルレンマット・オスト地区 ゲーテアヌム訪問	Basel市 Dornach村
11月 5日(日)	帰国	

2023年10月30日(月) 1日目 🇩🇪

木繊維断熱材 STEICO 本社

初日の視察先はドイツで木繊維断熱材を製造しているメーカー STEICO の本社視察であった。説明や案内をして頂くのは STEICO アカデミー・チーフのフロリーナ・ツァンケル氏。

マイスターの資格を取得されておりマイスターの制服で私たちを迎えてくれた。木繊維断熱材を製造している会社は世界で3社しかないなく STEICO はヨーロッパの4カ国で断熱材を製造している。

STEICO 本社は木造4階建て、木繊維断熱材の使用や、建物の防火構造について説明を受ける。日本とは法律が違うため、外壁の延焼ラインを気にする必要が無く窓は全て木製トリプルアルミクラッドサッシが使用されている。又、地震による耐震性も考える必要がないため耐風圧の

計算だけで良いとの事、うらやましい限りである。

断熱性能面ではヒートブリッジを小さくするためにH型の間柱を使用することで木材の量を1/3に抑え断熱性能を高めているなど高性能な建物にする為の説明を受ける。断熱材は付加断熱共に木繊維断熱材と説明をしているスライドの中に見慣れた“PassiveHouse”のマークがあった。

認定はとっていないが建物自体は“PassiveHouse”基準である。120名の社員が快適に働いており当然のように建物自体は、エネルギー削減や持続可能を実現する建物である。

また、STEICO 社の使命は「森の中で長期的に長く」をテーマに“1本の木を切ったら2本植える”と持続可能で環境の事を常に考え実行している。



- ① STEICO 社本社で工場や製品の説明を受ける。企業理念「木は育った分使うこと、そして長期的に使うこと」
 ② 工場の建物自体はPassiveHouse性能を満たしている ③ フロリーナ・ツァンケル氏 マイスターの制服で出迎えてくれた



プリンツ・オイゲンパーク (木造建築を使用した環境モデル集落)

建築家ウルフ・レスラー氏案内

ミュンヘン東部にある旧プリンツ・オイゲン兵舎で、ミュンヘン市が都市開発のために国から買い取った軍事区域のうちの1つであり、都市計画で取り組まなければならない3つの柱がある。

- ・社会的混在（あらゆる所得層世帯を混在させ、社会的孤立を防ぎ社会を安定させる）
- ・街区の発展
- ・エコロジカルな建築

木造建築を使用した環境モデル集落として建設しており、敷地の中にあった古い木を残し周辺環境にも配慮されている。最大7階建ての建物はハイブリット木造建築から純木造建築まで様々な工法を用い木材をふんだんに使った建物が建ち並ぶ。ウルフ・レスラー氏が案内の中で言った言葉がとても印象的で「木造建築は“成長する資源”である。」との説明を受けた。この地域では、住居空間1㎡に対して何kgの木材が使用されているかによって補助金の金額が3段階に分かれており最低の割合が50kg/㎡（コンクリートと木材のハイブリット工法）で補助金1,350万€、120kg/㎡（1階と階段コンクリート、他木造）で補助金1,850万€、150kg/㎡+木外壁60kg/㎡（全て木材）だと2,800万€の補助金が出る。集落の中には最大280kg/㎡の木材が使用された建物もある。そして、ここで建築されている建物は**ミュンヘン州都の最低性能基準からPassiveHouse基準**まで建っている。室内は見学できなかったが外壁はどの建物も板張りで施工されている。当たり前だが日本でよく使用されるサイディングボードは見当たらず、“成長する資源”の活用を私たちも見習わなければならない。

シュタイコゼル吹込み現場

今回のツアーで唯一の工事現場の視察である。1本の木材より12㎡の断熱材が製造できるなどの説明を受け、壁厚240mm、屋根厚280mmのシュタイコゼル施工現場へ。1時間に10㎡がブローイングできるマシンを使用し、40~50坪の住宅だと作業員2名で1日から1.5日あれば完成するという、年間3000棟のブローイング工事を行っている施工会社の施工を見せて頂く。外壁付加断熱にはSTEICO Duo Dry 充填断熱はSTEICO Zellで気密は室内のOSB合板でとっている。OSB合板にブローイングする穴が開いておりホースを差し込んで上下にかなりの圧力で吹き込んでいく。日本の施工だと吹込み用不織布を張り、ゼル施工後に再度気密シートを張る、施工の2度手間は省けるが、どのような状態で吹き込みされているか目視できないことと、施工を忘れると充填断熱がされていない箇所が出る為、熱橋になってしまうので要注意だなと感じる。壁の厚みも違うが、几帳面な日本人と大らかな欧州人の違いだろうか。



- ④ プリンツ・オイゲンパーク 木造・エコ集合住宅街で様々な建物が建ち並ぶ
- ⑤ 木外壁の建物が多く、経年したようなシルバークレーの外壁が並ぶ
- ⑥ 建築家ウルフ・レスラー氏による都市計画・行政・補助金などの説明を伺う
- ⑦ プリンツ・オイゲンパークにある戸建て住宅。成長する資源である木を多用している
- ⑧ シュタイコゼルの施工現場見学。OSB合板の穴から木繊維をブローイングしていく

ホルガー・ケーニッヒ氏講演

ツアー 2日目は『欧州及びドイツにおける建築環境政策の最新動向』というタイトルでホルガー・ケーニッヒ氏による講演が始まった。セミナーでは、未来に通じる建築として環境と健康は分けて考えないといけないなど、健康は利己主義でも良いが環境はグローバルに大きな空間（地球全体）で考えなくてはならない。また、建設によるエネルギー消費の削減としては省エネルギーな建物はマストである。

環境 ⇒ 再生・原料・成長する材料（サーキュラーエコノミー）

健康 ⇒ 快適性・湿度・音・臭い（五感）

Von der Wiege bis zur Bahre：揺り籠から墓場まで

「この世に生まれてから去るまで、社会全体で面倒をみましょう」という社会保障制度

Von der Herstellung bis zur Beseitigung：生産から廃棄まで

エコ収支の計算を行い建材製品の循環が大事で木造建築は炭素の中間貯蔵庫であると言われるように欧州では特に木材利用は“成長する資源”としてライフサイクルを考慮した建物計画を大切にしている。

また、ケーニッヒ氏は最後に未来に通じる建築とは『次の世代への責任を引き受ける事』と締め括る。私も参画しているグループ「House de Oreganic」の目的も、建築を通して『子供たちに豊かな未来を残す。』であり、まさに同じ志だと共感した。

ヘルマン・カウフマン氏の建築視察

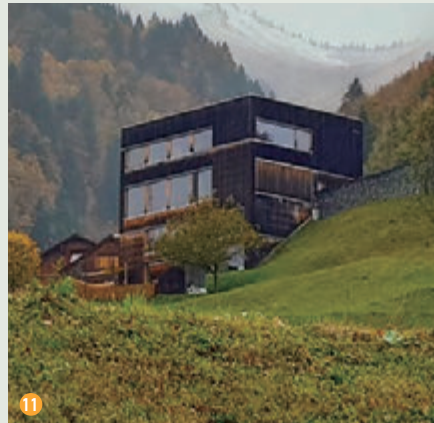
場所をドイツからオーストリアへ移し、建築家ヘルマン・カウフマン氏の案内で3箇所の物件を巡る。

・ザンクトゲロルド村の歴史的修道院施設の改修現場

・ヴァンダンス村の電力会社ビルIZM水力発電

・ゲツィス村の社会福祉的な木造集合住宅

ザンクトゲロルド村の歴史的修道院施設に向かう途中2010年にパッシブハウス・ジャパン（PHJ）のツアーで視察した建物が見えた。私がPHJ賛助会員になって最初に参加したツアーだったこともあり今でも鮮明に覚えている。小さな村役場の施設で同じ建物の中に幼稚園も入っており、室内は床・壁・天井全てモミの木かトウヒが使われとても綺麗に仕上がっていたのを思い出す。



⑨ ホルガー・ケーニッヒ氏による講演『欧州及びドイツにおける建築環境政策の最新動向』 ⑩ 2010年のPHSツアーで見学した村役場施設

⑪ 2023年今回のツアーでは通りすぎるだけではあったが経年した外壁からも自然との調和が感じられる

⑫ ヘルマン・カウフマン氏の案内で訪れた修道院施設の改修工事



13

ザンクトゲロルド村の歴史的修道院施設の改修現場

まず最初に案内されたのが修道院施設の改修現場である。陽気な牧師がパイプオルガンの演奏で私たちを出迎えてくれた。設計を建築家ヘルマン・カウフマン氏に依頼した理由は“普通でない建築家だった”から、辺境の地に1000年続く修道院で布教を続けていくこともまた普通では為し得ないことである。ここで使われている材料は粘土と木（トネリコ・モミの木）で出来ていると説明を受け、案内して頂いた墓地は版築の壁でとても素晴らしいものだ。次に案内されたのは1000年前の納屋だった場所を宿泊施設に改修した建物だ。1000年前の木材の組み合わせで仕上げられておりとても美しく纏められている。施設の改修では“解体の事を考えて接着していない”とのことで、断熱材も含めて100%自然素材でありライフサイクル（LCA）を考えた素晴らしい建築である。



14



15



16



17

ヴァンダンス村の電力会社ビル IZM 水力発電

会社は休業日だったが日本から視察に来ると言う事でわざわざ秘書の方が開けてくださった。湖畔に突き出る様に建っている建物は1階コンクリート、2〜4階は木造の混構造。工場でプレハブ化されたパネルを現地で組立し、6週間で建て方が完成する。水力発電会社の事務所で使っているエネルギーは当然100%自然エネルギーで、余った排熱は地域暖房として供給している。従業員は300人で、へき地でも働きに来てもらう為に高級感のある建物と快適な空間を目指し、柱はトウヒ・仕上げにナラ材を使用する。カウフマン氏の説明の中で“木は人に近い建材”と言う言葉がとても印象的だった。パッシブハウス・ジャパンのメンバーですと紹介して頂くと“この建物もPassiveHouseだよ”と答えてくれた。



18



19

- 13 教会の牧師がパイプオルガンで出迎えてくれた
- 14 ヘルマン・カウフマン氏と。「普通ではない建築家」と「普通ではない牧師」
- 15 教会エントランスの漆喰壁。室内は木と粘土壁で仕上げられている
- 16 墓地への壁は1000年前に建てられた版築壁
- 17 IZM水力発電所の社員食堂。一番見晴らしの良い場所に配置されている
- 18 ヘルマン・カウフマン氏からIZM水力発電所の説明を受ける
- 19 素晴らしい景観を崩さず、風景に溶け込んだような建築



2023年11月1日 (水) 3日目



エシェンツ村 戸建てミネルギー住宅

ツアー 3日目はスイスに入り、建築家 トーマス・メッツラー氏の案内による戸建て住宅の視察で、スイスの認証制度ミネルギー基準の建築である。ミネルギー制度の事はあまり知らないで調べてみると1998年に基準化された省エネ住宅が「ミネルギー」、2002年に基準化されたのは「ミネルギー P」でパッシブハウスの性能、2007年に基準化された「ミネルギー P・ECO」で、パッシブハウス性能でさらにエコジカルな建材を使用する。パッシブハウスは外皮性能を基準に考えているがミネルギー基準は給湯、暖房にかかるエネルギーを出来るだけ太陽熱やバイオマスなど自然エネルギーを使い一次エネルギーに対して厳しい基準を設けている。視察先の地域での持ち家は40%で賃貸住宅が60%の比率であり、戸建ての価格は平均2億円で富裕層が対象となる。建物は2階リビングでシンプルな造り、キッチンにはレンジフードはなくIHと一体型で室内循環型の換気となっており外気の影響を受けないので温熱的にはとても優位に働く。地下室には地中熱ポンプ・ヒートポンプ・熱交換換気などの設備が配置されていた。

ヴィツィコン市ミネルギー

P・ECO プラスエネルギーハウス

2つ目の視察先は建築家 フランツ・シュニーダー氏によるミネルギー P・ECO の分譲住宅。15名の設計士がいるアーレント設計事務所では25年前よりエネルギー効率が高く環境にやさしい住宅建築の専門家として新築、改築、増築などを手掛けている。視察させて頂いた建物は外壁自体が太陽光パネルとなる太陽光ファサードと木の組み合わせ。太陽光パネルは屋根だけではなく一日中発電できるようにベランダの腰壁にも設置されており、地下室には蓄電池を設置しプラスエネルギーな建物となっている。又、電気自動車もカーシェアリングを導入し住人たちが共有している。建物の省エネ性能はミネルギー P・ECO でパッシブハウスの断熱性能となっており室内の粘土壁には冷水・温水を通して輻射による冷暖房を行なっている。

②① トーマス・メッツラー氏のミネルギー P 住宅の見学 ②② 住まい手から直接話しを聞くことができた ②③ 壁に施された配管に温水・冷水を通す輻射式の冷暖房システム ②④ ベランダ、外壁全てに太陽光パネルを設置。3-10月には100%自家消費できる ②⑤ フランツ・シュニーダー氏案内によるミネルギー P・エコ住宅。黒い外壁は太陽光ファサード

エコバウ建築ツアー 参加者アンケート

こんなにも魅力的で期待以上のツアーに参加でき、感謝しかありません。毎日の訪問先も宿泊先もプログラムも、ワクワクの連続で期待外れもただの一つもありませんでした。毎日が2、3日分の記憶の濃度があつたように感じています。「建築」という目的が明確だからこそ、メンバーの皆さんとも楽しく過ごしながら最後まで集中して毎日刺激を受け続けられた、怒涛の一週間ツアーだったと感じています。(萩原様/東京都)

コーディネーターである滝川さんの翻訳があることで、さらに理解が深まってすべての訪問先、講演会が有益なものとなりました。また個人邸、集合住宅、大規模建築とカテゴリーが違う建築の、それぞれのメーカーの視点やパネル工場などの生産体制、工事中の施工現場、完成後の生活風景と横断して見る事ができた点が大変良かった。(石田様/山形県)

次号 ikeco Vol.45 につづく

コラムでもツアー情報公開中!



第53回店舗総合見本市 Japan Shop2024に出展

第53回 店舗総合見本市

JAPAN SHOP 2024

3 / 12 火 2024 3 / 15 金 の4日間

【会場】東京ビッグサイト東展示棟

今回のJAPAN SHOPでは「サステナブルな未来のためのデザイン&テクノロジー」をテーマに、脱炭素社会実現に向けた最適な空間デザインや店舗運営のあり方などを提案しています。イケダコーポレーションでは、スイス漆喰カルクウォール、スイスの粘土仕上レームプッツを用い、左官による特殊仕上げを展示・出展します。漆喰や土壁のもつ自



然で柔らかな表情と質感、特殊仕上げによる高級感のある仕上がりをご覧ください。左官による伝統技法でワンランク上の空間デザインを是非ご覧ください。また、隣接する会場では建築・建材展2024を開催しています。是非ご来場ください。



出展情報・
来場事前登録は
こちら



配信情報

エコバウ建築ツアー2023

「未来に通じる建築」

ホルダー・ケーニッヒ氏セミナー動画配信

2023年10月29日から9日間の日程で開催したエコバウ建築ツアー。そのツアー中に講演頂いたホルガー・ケーニッヒ氏によるセミナーの動画配信を予定しています。欧州における行政の規制と、環境負荷を抑えた持続可能な建築とは何か。成長する資源である木材の活用報告などを事例とともに解説します。是非ご視聴ください。



ご視聴は
こちらから



Holger König /ホルガー・ケーニッヒ氏

エコバウ建築ツアーの現地コーディネーターを2016年まで務め、20回目のツアーを節目に自身が手掛けるエコ建材の評価システムと持続可能な建築の品質認証評価に専念し、欧州の様々なエコロジー建築のサポート・認証を行う。2008年、2017年に日本国内で開催したBigセミナーの講師を務める。

木製断熱材 STEICO BASE
～床下兼内付加断熱材～

新製品
近日公開
予定!

ウッドライフさんの新社屋でも採用いただいた木繊維断熱材シュタイコベース。床下の断熱・遮音ボードの利用やリフォーム・改修時に部屋内に張る付加断熱材として、遮音性と蓄熱材としての可能性が広がります。

【熱伝導率】0.048 W/(m・K)
【比重】250 kg/m³
【圧縮強度】150 kPa
【厚さ】20mm
【原材料】トウヒ、ポリウレタン樹脂

ドイツ自然塗料 レイノス製
天然粘土塗料 レームファルベ

ドイツ ハンブルクにあるレイノス社のレームファルベは高品質な白粘土が主成分のサステナブルな水性塗料です。「透湿性」「調湿性」「静電気防止」効果と艶の無い高級感のある仕上がりは住まい手の健康にも配慮した世界トップクラスの自然塗料です。



詳細はHPより
ご確認ください。

